

「北摂三田ニュータウン」のできるまで

講師：三田市史執筆委員・同志社大学社会学部教授 鯨坂 学

1. 戦後日本のニュータウン計画

大都市圏人口の受け皿として計画された大規模ニュータウンは、大阪府による千里ニュータウン計画の成功が先例となる。北摂ニュータウンはより大規模化・郊外化したプランとして、大阪府の泉北ニュータウンなどと同時期に計画される。

2. 北摂ニュータウンの初期の構想：イメージプラン（資料 4 1）

北摂ニュータウンは、先例となる千里ニュータウンと違い工業団地が設定されており、イギリス流職住近接の「田園都市」の考え方を踏まえた構想となっている。

◇センターをどこにおくか：既存市街地との関連

◇鉄道をどこに通すか：駅の設置問題との関連

→自家用車をもちいた買い物動向が念頭におかれておらず、既存市街地とニュータウンのセンターとを分離し、それぞれに鉄道駅があることで両立がはかれると考えている（当初計画では既存鉄道の付け替え構想は不明確）。

◇幹線道路：地区をループ状にとりまき、バス・自動車道と位置づける（ループ内は歩行者中心）。

◇計画人口—15 万人

大阪・神戸に対するベッドタウン化については、ニュータウン域外との関連人口を 50%程度と少な目に見積もっている（「田園都市」の発想。実際にはベッドタウンとしての性格が予想よりかなり強くなる→資料 146 では 75%以上）。また流入世帯については、比較的若年の（年功賃金制度のもとでの）低所得者層が中心になると予想。

◇住区計画：3 地区各 2～9 住区の設定を計画。2 住区 1 小学校の人口規模で計画（従来は 1 住区 1 小学校の考え方が主）。

◇コミュニティとコミュニティセンター

1969 年の国民生活審議会で提案された「コミュニティ」の語を計画に盛り込んでいる点が特徴。徒歩によるコミュニティ圏と自動車によるコミュニティ圏の両方を想定している。またコミュニティ形成の場としてのコミュニティセンターの必要性に計画で触れており、それを実現させた点は他ニュータウンに比べて先進的と言える。

3. ニュータウン建設への課題：兵庫県への要望（資料 9 8）

市の財政問題、農業振興、水の確保、大学の設置、福知山線複線電化と三田駅の存置

4. どんな人々がニュータウンに住もうとしていたか（資料 1 4 6）

神戸市への通勤者が予想よりもかなり少ないことが判明→「大阪向きのベッドタウン」として福知山線の輸送改善が急務となる。

5. 景観に配慮したまちなみづくり（資料 1 4 8）

景観計画形成への取り組みは同時期の他の大規模ニュータウンと比べて徹底しており、先進的であると評価できる。